

当日参加された方のご感想

第1部 基調講演

「お世話」ではなく、一緒に生活していく仲間という視点で、活動していきたいです。

「その人を知る」という関わり方を一番に考えていることに、目からうろこでした！

笑って泣いて、あっという間の講演でした。感動の涙に自分でも驚いてしまいました。

おばあちゃんになったら、何のプロフェッショナルになれるかな...何かのプロになりたいな...と思いながら聞きました。

第2部 実践報告

間口を広げて受け入れることで活動の幅が広がるので、まず一歩踏み出すことが大切だと学びました。

障害のある方や認知症の方、小学生など色々な人がともに生きる報告が良かったです。

「支援する人・支援される人の垣根を越える」という考えが広がるよう努力していきたいです。

各団体が話された地域に根付く努力やつながり方を、自分の町でも取り入れたいです。

第10回 よこはま地域福祉フォーラム

日時 令和7年12月4日（木）13:00～16:00

会場 関内ホール 大ホール

開催方法 集合型 および 後日録画配信

主催 横浜市社会福祉協議会・18区社会福祉協議会

共催 横浜市健康福祉局・横浜市こども青少年局



協力企業様のご紹介

「よこはま地域福祉フォーラム」をはじめとする、横浜市社協が行う地域福祉推進に向けた事業等へのご寄付をいただきました。誠にありがとうございました。



社会福祉法人

横浜市社会福祉協議会 企画部企画課



所在地 横浜市中区桜木町1-1

メール kikaku@yokohamashakyo.jp

横浜市健康福祉総合センター 7階

ホームページ <https://www.yokohamashakyo.jp/>

電話番号 045-201-2090

FAX番号 045-201-8385



「よこはま地域福祉フォーラム」は、一部共同募金の配分金で実施しています。

第10回 よこはま地域福祉フォーラム 報告書



令和7年12月4日に「第10回よこはま地域福祉フォーラム」を関内ホールにて開催し、474人の方にご参加いただきました。

第10回となる今回は、「支援する」「支援される」の垣根を越えた地域づくりの取組や、多様な主体の連携が育むまちづくりの可能性等、様々な実践報告を通して、みんなが関わりあう地域づくりに向けて何ができるのか、皆さんと一緒に考える機会となりました。

第1部 基調講演

かとう ただすけ
加藤 忠相 氏
株式会社あおいけあ 代表取締役



「ごちゃませ」からみえる未来

～このまちで、ゆるやかに交わりともに暮らす～

恩師に教わった「居場所の大切さ」と「命の使い方」

小・中学校でいじめに遭い居場所を失っていましたが、高校の吹奏楽部での先生との出会いにより「ここにいていい」と感じ、居場所の大切さを知りました。

僕が高校を卒業後、先生はがんを患いました。医師の制止を振り切って、病と闘いながら全国大会で指揮をした先生の姿から、「命の使い方」を学びました。この経験は、現在の仕事や生き方にも生かされています。

高齢者は元々何かのプロ！得意を生かす環境づくり

僕らの仕事は、自立支援であり支配や管理ではありません。高齢者は元々何かのプロです。一人ひとりの人生や得意分野を生かし、地域や誰かの役にたてる環境をつくるのが居場所に繋がります。

あおいけあは、子どもから高齢者までがともに関わりあう、地域に開かれた場です。このような環境で育った子どもたちにとって、高齢者は「認知症の人」ではなく一人の「〇〇さん」なんです。

認知症になっても希望が持てる社会へ

介護は、「お世話」から「自立支援」へと考え方が変化してきました。その中で、高齢者が「ありがとう」と言ってもらえる環境をつくるのが僕らの仕事です。

医療や介護の目的は、その人が地域社会で質の高い生活を送ることであり、我々はそれを支える杖です。高齢者が輝いている姿を見て、年を重ねても希望が持てる社会を子どもたちに示すことが、最も重要だと思っています。

第2部 実践報告



島田 恵 さん (中丸町内会 会長)
佐々木朝子 さん
 (六角橋地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター)
原島 隆行 さん
 (NPO法人 まち×学生プロジェクトplus)
下菌 徹 さん
 (Two Birds Consulting株式会社 代表取締役)



渡邊 敦子 さん (白根みらい食堂 代表)
石川 良幸 さん (白根みらい食堂)
鈴木 実 さん (不動丸ファーム)
世良田知美 さん
 (白根地域ケアプラザ 所長)
樋口 英里 さん
 (白根地域ケアプラザ 生活支援コーディネーター)
杉山 遥 さん (旭区社会福祉協議会)

安心して買い物できる！ ～移動支援の中でICTを活用した見守り～

バスの路線が廃止され、買い物に困った高齢者のために、地域で何かできないか…。その思いを実現するため、地域と福祉事業所が連携し移動支援の取組を開始しましたが、初回実施時に参加者が熱中症で救急搬送される事態となり「見守り」の必要性を実感しました。

「一人でゆっくり買い物を楽しめる見守りの仕組み」を検討する中で、企業やNPOとも連携、位置情報を正確に把握するスマホ（ICT）の活用につながり、今では安心して安全な移動・買い物支援が実現しました。これからも地域・福祉・他業種が連携協働し、住民のための活動を考えていきたいと思っています。

ディスカッション

企業など外部の力を借りよう と思ったきっかけは？

外部の人からのアイデアが町内会の皆さんの利益につながるのであれば、町内会に属していないからと排除するのではなく、積極的かつ柔軟に受け入れていくべきだと考えます。

解決策を見出すには、まず何かを受け入れて一歩踏み出すことが近道だと思います。

企業が、地域や町内会の活動を支援するメリットは？

企業にとって、「貢献活動」が実現に至るには物語が重要です。今は中丸町内会での取組ですが、大都市の横浜で成功すれば、いずれ日本の先進事例にもなります。物語に共感した社内からの後押しもあり、社会貢献活動の一環として現在も協力し続けています。

地域活動を支援する団体・職員に必要な発想・意識は？

地元の情報だけでなく、市内や県内、他業種に視野を広げるのは大事な視点です。
 いろいろな人と関わることで、出会えていなかった地域の企業、思いや考えを持った人とつながるチャンスが増えるのではないかと思います。

コーディネーター

なが た ゆう
永田 祐 教授

(同志社大学
社会学部社会福祉学科)



神奈川県の発表では、課題が出てきた時に「どのようにクリアするか」と考えることが重要だと感じました。また、企業やNPOなど外部の考えや人を受け入れて一緒に取り組む「開く姿勢」は、活動を前に進めるために必要なことだと学びました。外部の方と積極的につながる地域、とても大事だと思います。

障害がある人もない人も、誰もが地域の一員に

「障害について知ってほしいので講演会をしたい」という相談が、障害当事者のNさんから区社協に入りました。「思いを理解してくれる仲間づくり」を目的に始めた地域食堂や畑でのボランティア活動をきっかけに、Nさんは自分の居場所と役割を見つけていき、今では地域活動の担い手の一員としていきいきと活躍しています。

障害のある方と活動することに最初は戸惑いもありましたが、同じ時間を過ごす中で、障害者ではなくともに活動する仲間として関わるようになりました。

障害がある人もない人も、誰もが地域の一員として居場所や役割がもてるような地域を目指していきたいです。

ディスカッション

Nさんとの具体的なエピソードは？

高齢のボランティアが多い中で、重い荷物の運搬をしたり、スマホを活用して地域食堂のBGMを流したりと活躍しています。お互いに自然にお礼の言葉が出るようになり、関係が構築されていききました。その人の個性を捉えて活躍の場をつくるのが重要だと思います。

活動の場を広げていったNさんの変化は？

人付き合いの幅がどんどん広がり、本人も自分に自信が持てるようになったと思います。
 地域活動をPRする広報紙を作成し、小学校に掲示を依頼するなど、広報活動も自ら提案して積極的に行いました。障害理解についての講演活動も始めています。

Nさんと関わることで生じた周囲の変化は？

新しい活動や活躍についてNさんから報告があると、みんな手をたたいて喜んでます。本当に一緒に活動する「仲間」なんだと感じています。関係性にも変化があり、今では「○○ちゃん」と呼ばれ、お友達としてお付き合いしています。

旭区の発表は、ご本人の物語が動き出すことで、周りも元気になっていくあたたかい発表でした。専門職は「障害のある○○さん」と見てしまいがちですが、地域の皆さんは同じ地域に住む仲間として付き合っています。その関係性が安心できる居場所を生み、役割を発揮できる機会につながっていきます。

地域活動においては担い手不足が課題ですが、自分たちだけで解決するのではなく「○○×福祉」の発想が大事です。企業等も含めて、地域にはまだ活躍できていない人がいるかもしれない。そういう人たちが安心して活躍できる場をつくるのができないか？ぜひ地域に戻って考えていただきたいです。